

ブランコをこぐ

—— 内から湧き出でる意欲 ——

津守 真

ブランコを力一杯こぐ

一人の子どもが座りブランコを力いっぱいこいでいた。傍らについていないと危ないくらいである。この子は精一杯こぐのが面白い。

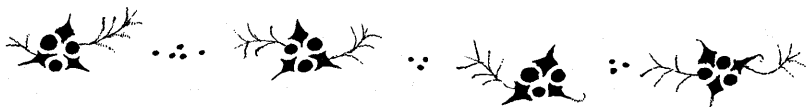
ブランコの床の上に立ち、足の裏に力を入れ、両足に交互に力をいれてこぐ。身体



の一点に力をこめ、精神を集中させる自我（中心性、全体性、能動性）ができていることが分かる。つい数か月前まで頼りなげに手のひらを空に向けてひらひらさせていた子どもである。身体の一点に心身の力を集中させて活動することが、自分で何かをやったという感覚を呼び起こす。自我は、一点にエネルギーを向ける中心の感覚であるが、それは全体性の感覚によって支えられている。すなわち、力一杯何かをする体験の以前に、混沌の過程での諸体験がある。混沌から中心を見いだすには保育者の助力があるにせよ、子ども自身の力がその推進力である。自我にはその主体的能動性の感覚が欠かせない。

この子は物を手から放すことが苦手で、私はそのことをめぐって苦心した時期がずっと続いていた。保育の中で彼の精神的課題が解けて後（このことが実際に保育の中で起こるのは不思議である）、この子はトランポリンをとぶことを喜んだ。私の手をとって「一、二、三」で高く飛び上がり、ころがったところで背中をくすぐるとケラケラ笑った。ブランコが視野に入り、立ってこぐことに夢中になったのは、その直後のことである。

ブランコに立ってこぐのを私共が見るとき、この子はブランコが好きだという言葉ではすまされない。その場面だけに出会った者には具体的なことは分からないが、そこまで成長した自我の感覚を背後に見なければならぬ。



ブランコのイメージ

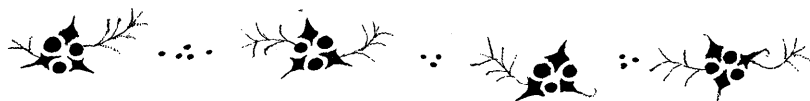
この子が自我の活動の対象をほかならぬブランコに見いだしたのは、足に力を入れてこいだときに頬のわきを通る風のイメージがこの子の心になつたからであらう。ブランコにつづいて、この子は水を好んだが、ホースの先に指をあててしぶきを空に飛ばすことを何週間もやった。水と風のイメージの結合である。この後彼の興味と技能はいろいろの面に次々にひろがっていった。

絵の具を塗る―印をつける

この子は、ブランコに立ち上がり、自分の足の裏に力を入れて風を切る感覚を満喫した後、ブランコからおりると、筆に赤い絵の具をつけてブランコに塗り、私の髪の毛に塗った。この場所で、この人に助けられて、自我を強くしたんだと印をつけているように思われた。

影になる子ども

この子が力いっぱいこいでいるブランコの傍らにもうひとりの子どもが乗っていたが、強くこがれるのが嫌で、泣き声を出した。同じように揺れていても、他人がこい

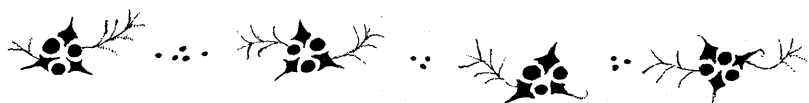


だのでは風を切る感覚にはならない。力一杯何かをやる子の隣には、影になっている子どもがいる。その子は、いろいろの感情をもってそこにいるのだろう。受け身になって揺らされる怖さ、得意になっている子どもに対して、また、大人が注意を向けていることへのうらやみや恨みなど。保育者は今度はその子に目をむけて力を注ぐ。

その子は私が手や物を差し出しても受け取らない。こういうことがかなり長くつづいていた。受け取らないときには、差し出した人に対するマイナスの感情があるのだろう。私が母親と話を始めると、たちまち、私の傍らからはなれてかなりの距離のところではねた。他人の直接の関心から離れると、それまでとらわれていた感情から解放されて、自分らしい行動をすることができる。この子はしばしば目を宙にさまよわせてうつろな表情になるのだが、こうして跳びはねるときはしっかりと行動している。そのうちに私の背中に乗り、私におぶさって歩く。

ジグザグに歩く

ジグザグに歩くのは、その運動が示すように、子どもの心が定まらず不安定に揺れていることを示す、明瞭な目標をもっているときには、人は一直線にそこに向かって歩いて行く。外側から与えられた意識的目標ではなく、心の内から意欲が湧き起こるのには、無意識を含めた全体の中で自分の目標が定まってこなければならぬ。自分

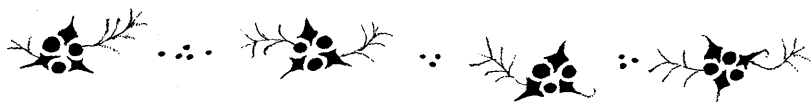


自身の人生の生きがい結び付く目標を見いだすのは、簡単ではない。子どももそれに行き当たるまでには、遍歴を必要とする。

次の日の朝、その子どもが庭で母親にくっついていたので、私は傍らに行き、手を差し出した。その子は私の手を振り払った。ときどき庭の真ん中へ走って行き、あっちに行ったと思うとこっちに来て、ジグザグに小走りに走り、うつろな目を空に向けて立ち止まり、また母親のところにもどった。かなり長い時間ジグザグに走ることを繰り返していた。

私はどういふことかと考えながら傍らにいと、母親が、「これはどういふことなのでしょね」と話しかけた。「あなたはどお思いますか」とたずねると、「私がいなくなるのが心配で落ち着かないのかもしれない。月曜日には懇談会に出たいと思っていいたら離れなかったし、今日は美容院に行きたいと思っていると私のそばを離れない。子どもって敏感ですね」と母親は言った。私共が話していると子どもはピョンピョン跳びはねて庭の中央に行った。私は母親が立ち去らないことが子どもに分かるのがいいと考え、母親と砂場のへりに腰をおろした。子どもはすぐに砂場に来て、砂を手でさわり、シャベルを手にした。

庭の真ん中でホースから水を飛ばしていた子どもが、容器に水を入れてその子に差し出した。ブランコを力いっぱいこいでいた子どもである。自我が強められたとき、

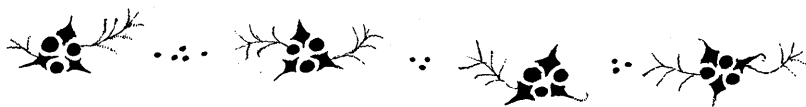


子どもは他人に対して目を向けるようになっていく。相手の子どもは水の入った容器を受け取り、さっきとは違った活気をもって砂をやり始めた。靴と靴下を脱がせるといやがらず、砂場で足を埋めたり、水をこぼしたり、砂山の上を跳びはねて楽しく時を過ごした。

ジグザグに歩いていたときには、母親に対する配慮や私に対する感情がこの子の心を揺り動かし不安定にさせていたのではない。うつろな目で宙をみている子どもに、そんなに複雑な気配りや感情があらうとは、顔を合わせているときには考え及ばないのだが、こうして後からそのときの状況を子細に考え直してみると、そうとしか思えないのである。子どもは大人が考える以上に、人間関係の根本を分かっている。そしてその中で自分がどうすればよいかを考えている。言葉を話さない障害をもつ子どもや乳児でも同様である。母親とわたしとが砂場の縁に腰をおろして落ち着くと、子どもは自分の遊びをはじめた。ブランコを力いっぱいこいでいた子どももつい数週間前までは、同様に頼りない自我の持ち主だった。隣に座って泣き声を出していた子にも、いまようやく自我が作られ始めている。そのうちに両者が逆転するときもくる。

大人の生活の中で

ブランコを力いっぱいこぐというような遊びによって自我がつけられるのは幼少期



である。いろいろの事情で、中心性、全体性、能動性の自我の体験を十分にしないで大人になった人に、これから主体的な人間としての自我をつくるのは不可能なのだろうか。周囲の人がその気になるならば、育てることに不可能ということはない。時間もかかり、苦勞も多いだろうが、主体としての自我をつくることはどんな場合にも可能であるし、そこに本人としての生きがいがあることを信じたい。

ちょうどこの原稿を書いていたとき、私共の親しい女性が突然に亡くなった。経済界に身をおき、厳しい社会的な仕事をしておられた方なのに、いつも笑顔で穏やかに人に接しておられたその方が遺された書に「愛がなければ」という六文字があった。愛がなければ知識も献身も、どんな努力もむなしいという聖書の一節である。額装された風格のある書だった。その方を取り巻く環境が困難なものだったからこそ、内から湧き出する愛に何よりも価値をおかれた、その生き方が私共には痛いほど伝わってきた。ここまで強靱に自我が人間の一生のうちにつくられることに私は心を打たれた。